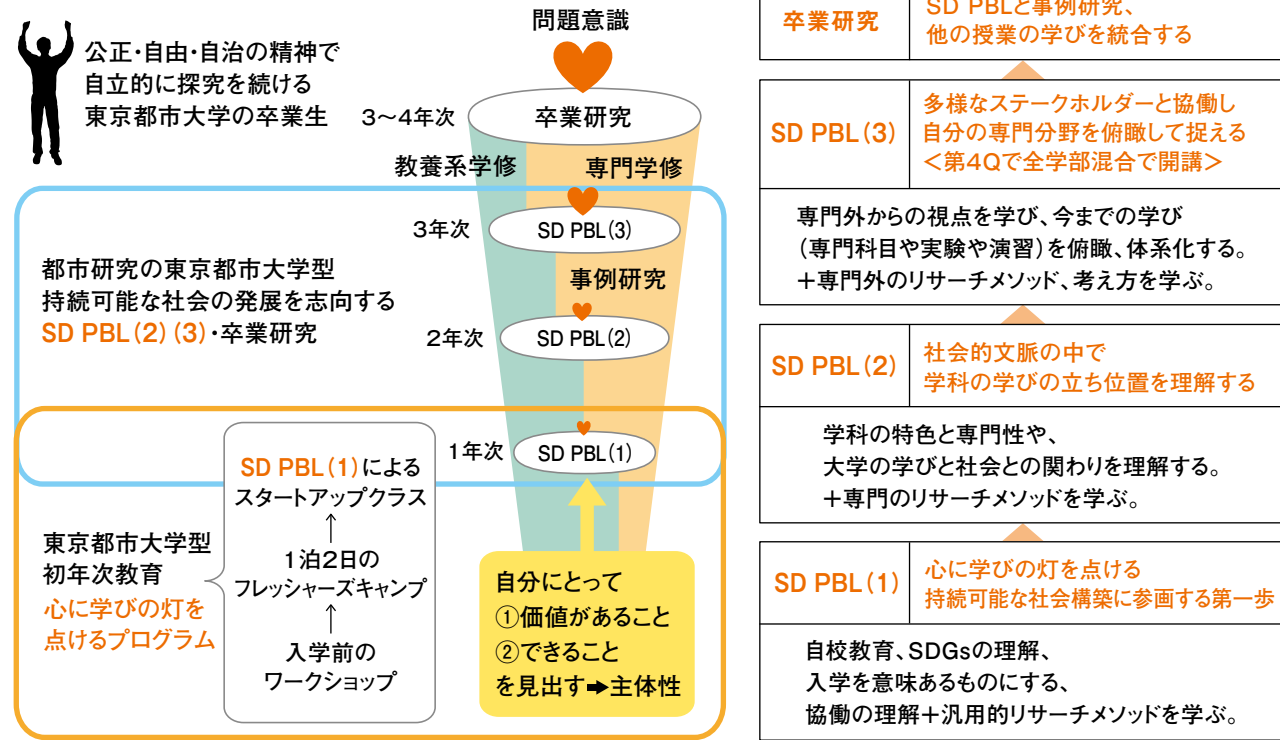




学生数/約7500人
 学部/工、知識、環境、メディア情報、都市生活、人間科学(2020年3月時点)
 大学院/総合理工学、環境情報学
 ▶THE世界大学ランキング日本版2019/総合121-130位、同インパクトランキング2019SDGs目標8 成長雇用101-200位、同Awards Asia2019国際戦略部門最終選考候補

狙い SDGsでボーダーを超える概念を学び、
 自分の可能性を拓き社会変革の意欲を芽生えさせる。

SD PBLのカリキュラム



科目	狙い
卒業研究	SD PBLと事例研究、他の授業の学びを統合する
SD PBL(3)	多様なステークホルダーと協働し自分の専門分野を俯瞰して捉える ＜第4Qで全学部混合で開講＞
SD PBL(2)	社会的文脈の中で学科の学びの立ち位置を理解する
SD PBL(1)	心に学びの灯を点ける持続可能な社会構築に参画する第一歩

学生と共につくる全学統合型PBL

心に学びの灯をともし続けるイノベーター育成へ

CASE STUDY

東京都市大学

学部学科ごと、科目ごとにバラバラに学んだことを統合させるPBLを1～3年次まで、全学で開講。既存の価値観にとられない「社会を変革していくリーダー」を育てる。



岩尾 徹
 教育開発室室長
 理工学部電気電子通信工学科
 主任教授
 いわおとおる●2000年中央大学大学院博士課程後期修了。2002年放送大学卒業。武蔵工業大学講師を経て、2009年東京都市大学准教授。2017年同教授。2019年から現職および教育開発機構教育開発室室長。専門は電力エネルギー。

波風を立てない人材を送り出し続けているのか

大学の教育改革は学長の陣頭指揮の下、アクションプラン2030の教育部門を担うために設置された教育開発機構が企画立案し、進めています。私は機構の教育開発室室長として、また電気専門の一教員として、いくつかの問題意識を抱えています。

さまざまな企業が変化に対応すべく、選択と集中や業態や業務の見直しをする時代に、専門だけを突き詰めた「電気オタク」を育て続けていいのか？あるいは企業の「まじめ。任せて安心」という本学出身者の評価。育てたかったのはそういう、過去の働き方を再生産するような人材だったか。さらに2018年度の学生調査では、「専門授業が充実している」

との声の一方「体験型授業が少ない」「他学部・学科の授業を履修しにくい」「社会で役立つ力は身に付いているのだろうか」と感じている学生が多数に上りました。そこで改革の柱となる科目として「SD PBL」を開発しました。これはもともと一部の学科で実践し、手応えがあった科目です。1～3年次に取り組み、卒業研究にまでつなぐ全学必修プログラムとして、この4月より開講します。社会問題を自分事にするにより、心に学びの灯をともし、卒業後も学び続ける、変革に挑むリーダーを育てることが目的です。1、2年次は学科ごとに、3年次は学部・学科混成のチームをつくり、例えば「電気×児童福祉」など、学生は各専門性を掛け合わせ自ら立てた問いの解決に挑みます。これまで修めた知識・スキル、態度を、他分野の知見と融合させて現実の問題解決に応用する。演習で終わらない、各学びを回収する統合型のPBLです。「社会で役立つ力が付かない」という学生の声への、私たちなりの答えです。

「脱チヨーク&トーク」 まず教員から変わる

学生を変える前にすべきは、教

員の意識を変えることです。私たちは、学生主体の学びを経験していません。そこで既存科目の書き換えで終わらぬよう、各学科2名を招集した「SD PBL デザイン研究会」を毎月開催し、この新しい教育法を学びました。潮目が変わったのは、腹を割って議論した合宿です。理念が共有され、皆で同じ船をこぐ。意識が醸成されました。この研究会メンバーが中心となり、全学科で導入する運びとなりました。並行して、学生から対面で授業への意見を述べてもらう「教職員と学生との協働FD懇談会」や、授業公開週間の利用促進など、教員が自身の授業を省察する機会を増やしました。今回の改革の構想を企業人に話した際、「変革を求める人材ばかりでは、仕事が回らない」という意見も頂戴しました。むしろ専門性は大切です。専門をベースにしながらも、本学は一人ひとりがイノベーターとして活躍する社会をめざしたい。既存の価値観を乗り越えるイノベーターを大学が送り出さなければ、日本の産業は成長力に欠けた現状のままです。大学の教職員が変われば学生も変わる。変化した学生を送り出せば、企業や社会も変わる——私はそう期待しています。

学生に聞く！ 教わるだけの立場から、学びを主導する存在へ 教員と共に教育を改善する学生FD委員会

「教員が学生に教育を与える」から、「教員と学生が共に学ぶ場をつくりあげる」という関係性へとシフトすることを狙いとして、東京都市大学は2018年度から学生との協働によるFDを始めている。2019年9月に行われた「教職員と学生との協働FD懇談会」には、学生FD委員57人が参加し、「3つのポリシーは学生にとって重要性が低い」「現在の学びと将来のつながりが見えるようにしてほしい」といった意見を教職員に投げかけた。学生FD委員の根本雄介さんは、「学生同士の関わり合いが、教育の質を高めるのでは」とSD PBLに期待を寄せている。海外の学会で何度も発表してきた経験から、自身の考えを積極的に提示し、視点を異にする他者の意見によって洗練させていくことの大切さを学んだという。「自分1人で勉強していると知識が閉じてしまいます。日頃学んでいる専門知識を、他分野を学ぶ

学生に話し、共有する。互いの知識を掛け算し、社会の問題に取り組むことによって、新しい発見を得る。そういったトレーニングの場が増えることによって、専門分野の外に視野を広げる姿勢が身に付くと思います。



「1人よりチームの方がよいアイデアが生まれた」「社会の中で自分の専門の重要性がわかった」「社会に出るのがワクワク」(SD PBLを先行して受けた学生の声)



学生FD委員
 総合理工学研究科 修士2年
 根本 雄介さん